

序論)

先週、まことの神である【主】が、傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯芯を消すこともない。素晴らし裁判官を送ってくださる。という預言をみました。この方は【主】にとって喜びとなる【主】のしもべであり、同時に本来裁かれるべき世界の人々を癒やし、活かし、国々の光となるお方だと預言されていました。

そのお方とは誰のことでしょうか。そう私達の救い主【主】イエスキリストのことです。世界の創造主なる神様はイザヤの時代からイエスキリストを、私達を救い出すさばき主として送り出してくださることを語ってくださり、事実その通りにイエス様をこの世に送り、そのイエスキリストによって私達を癒やし、活かし、私達を救い出してくださったのです。

先週の箇所では神様は、そのイエスキリストによってなされる救いの御業を「新しいこと」と言われていました。

今日の箇所はその「新しいこと」を経験したものが何をすべきなのかが語られている箇所です。

1) 新しい歌を歌え

まずは10節を読んでみましょう。

42:10 新しい歌を【主】に歌え。その榮譽を、地の果てから。海に下る者、そこを渡るすべての者、島々とそこに住む者よ。

聖書には「新しい歌」というものが3つの書簡で登場します。詩篇とヨハネの黙示録と、そして、このイザヤ書です。聖書がいう「新しい歌」というのは、ジャンルや内容的に新しい歌、いわゆる新曲のことではなくって、神様によって新しい体験をさせられた者の歌。つまり、救いの歌です。

私達の神様は、イスラエルをエジプトの奴隷から解放して神の民としての歩みをさせてくださったように、私達を罪の奴隷から解放し、神の子としての歩みをさせてくださいます。そして、やがてこの世界を過去のものとして、全く新しい世界を私達にくださいます。そういった神様の救いの御業を経験したものは、新しくされたものとして【主】を賛美せよ。と神様は命じておられるのです。

みなさん、私達の教会は比較的古い歌を歌っています。礼拝の最初に歌っている

ワーシップも 20 年以上前に作られた歌がほとんどです。でも、【主】に新しくされたものとして、【主】の救いを賛美するのならば、私達は「新しい歌」を歌っていることになるのです。

問題は【主】がこの「新しい歌を【主】に歌え」という命令を誰にしているか。ということです。11 節と 12 節を読んでみましょう。

42:11 荒野とその町々、ケダル人が住む村々よ、声をあげよ。セラに住む者たちは喜び歌え。山々の頂から声高らかに叫べ。

42:12 【主】に栄光を帰せよ。島々にその栄誉を告げ知らせよ。

(11 節を表示) みなさん、11 節に「ケダル人が住む村々」とか「セラに住む者たち」とありますが、この人たちがどのような人かわかりますか？。簡単に言えばケダル人とはアラブ人のことで、セラとは現在のヨルダンにあるペトラという地域に住んでいた人たちのことです。注目していただきたいのはこの「ケダル人」です。

創世記 25 章 13 節をみると、アブラハムが女奴隷に産ませた子イシュマエルの子どもの中に「ケダル」がいて、ケダル人とはそのイシュマエルの子孫であることがわかります。イシュマエルとはアブラハムが神様の約束を信じきれなかったために生まれた子どもであり、いわば不信仰による子どもです。そして、ケダルについて詩篇 120 篇 5 節から 7 節をみるとこのように書かれています。

詩篇

120:5 ああ嘆かわしいこの身よ。メシエクに寄留しケダルの天幕に身を寄せるとは。

120:6 この身は平和を憎む者とともにあって久しい。

120:7 私が平和を——と語りかければ彼らは戦いを求めるのだ。

この詩篇の作者はダビデだと言われていますが、ダビデは敵から逃げるために一時的にケダル人の地にいました。でも、そのケダル人自身が「平和を憎む者」であり、ダビデが平和を説いたとしても「戦いを求める」ような人たちだったのです。

今でもイスラエル人とアラブ人の戦いは続いていますが、この戦いは今に始まったことではなく、紀元前のダビデの時代から、もっというとアブラハムの子どもであるイサクとイシュマエルの時代からずっと続いているものなのです。

ですから、聖書的にいうとケダル人というのはイスラエル人にとって不倶戴天の

敵であり、決して共に賛美することなんてできないような人たちです。でも、神様はそのゲダル人たちに「新しい歌」を【主】に歌うように命じておられます。

なぜでしょうか。それはずっと【主】を拒絶していたような人たちさえも、【主】イエスキリストは救い出してくださるからです。

みなさん、ゲダル人はアラブ人だと先ほどいいましたが、アラブ人はそのほとんどがイスラム教徒です。みなさん、イスラム教徒だった人たちが共に【主】イエスキリストによる救いの歌、新しい歌を歌うようになるなんて想像がつかますか？なかなか想像できないですよ。でも、【主】の計画はそのように何千年もいがみ合っているようなゲダル人をも救い出し、共に新しい歌を賛美させるものなのです。

イスラム教徒の人たちさえも救い出される。ということはどうゆうことでしょうか。世界中の人に救いが届くということです。だから、10節と11節は、地の果てと町々、海と山、下ると頂きといったように対照的なことばが用いられて描かれています。

つまり、地の果てから町にいたるまで、海の下から山の頂にいたるまで、【主】イエスキリストの救いはすべての人を救うものであり、だからこそ、その救いに与った人たちは「新しい歌」【主】の救いの歌を歌えと命じられているのです。

みなさん、ご存知のように今日は橋本さんの洗礼式があります。ゴスペルを歌いながらもなかなか受洗に至らなかった橋本さんが救われ、その洗礼式の日この「新しい歌を歌え」という命令が【主】からくだされるのは、神様の不思議な摂理を感じます。橋本さんもそうですが、私達は【主】によって新しく造られたものです。第二コリント5章17節にはこうあります。

5:17 ですから、だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。

私達はキリストの救いによって新しく造られ、すべてが新しくされたのです。だからこそ、私達は「新しい歌」を【主】に心から賛美していきたいと思えます。

2) 救い【主】のみわざ

では、私たちを救ってくださった【主】の御業は、私達を救うだけで終わるのでしょうか。13節にはこのように書かれています。

42:13 【主】は勇士のように出で立ち、戦士のように激しく奮い立ち、ときの声を

あげて叫び、敵に向かって力を見せつける。

私達の救い主なる【主】は、勇士のように立ち上がり、敵に力を見せつけて戦ってくださるお方です。

出エジプトを経験したイスラエルが、その後、約束の地に入るために戦いがあったように、【主】に豊かに用いられたダビデ王、ソロモン王の後にも多くの戦いがあったように、【主】の救いを経験した後も、私達は様々な戦いを経験します。

以前もお話したように今の私達の戦いは血肉による戦いではなく、霊的な戦いですから、実際には戦争したり、喧嘩したりするわけではありませんが、しかし、そういった物理的な戦い以上に、厄介な戦いを私達はしなければいけません。

それは罪の誘惑との戦いであり、なんとかして神様から引き離そうとするサタンとの戦いです。そして、その戦いの中、なかなか神様が助けてくださらない。救ってくださらないと思うような時があるかもしれません。でも、【主】は14節のように言われています。

42:14 「久しく、わたしは黙っていた。静かにして自分を抑えていた。今は、子を産む女のようにうめき、激しい息づかいであえぐ。

神様は、神様の不思議な計画の中で、敵を打ち倒す時、私達を救い出す時を、妊婦さんが産みの苦しみをしている時のように、苦しみを我慢しながら静かに待っておられたのです。わかりますか？

神様は私達が苦しんでいるのを見て平気なわけじゃないのです。女性が経験する出産の苦しみのように、うめき声、喘ぎ声をあげなければいけないほど、本当に辛く苦しいけども、それでも、敵を倒す時がくるのをじっと待っておられるのです。

そして、その時がきたら、【主】はその時の山や丘、川、そして彼らの食料にいたるまですべて滅ぼしてくださるのです。それが15節

42:15 わたしは山や丘を荒らし、そのすべての青草を枯らし、川を中州ばかりにし、沢を涸らす。

そして、どうされるのでしょうか。16節を読みましょう。

42:16 わたしは目の見えない人に、知らない道を歩ませ、知らない通り道を行かせる。彼らの前で闇を光に、起伏のある地を平らにする。これらのことをわたしは行

い、彼らを見捨てはしない。

【主】の時に、【主】は敵の山や丘をあらし、青草や水をからしますが、【主】によって救われた人々に対しては、新しい道を歩ませ、彼らの闇を光に変え、彼らの歩みを平安な歩みにされるのです。

だから、救われた者の人生というのは、救われる前の人生の繰り返しではありません。ゴスペルを歌い続けた橋本さんは、今日洗礼を受けた後もきっとゴスペルを歌い続けるでしょう。でも、それは今までの人生の繰り返しではないのです。

【主】は救い出された者に「知らない道を歩ませ、知らない通り道を行かせる」お方です。知らない道、知らない通りを歩くというのは不安があるかもしれません。怖く思うかもしれません。でも大丈夫なんです。なぜならば、【主】が闇を光に変え、凸凹道を平らな道に変えてくださるからです。

【主】が16節の最後で明確に断言されていますね。何とされていますか？『これらのことをわたしは行い、彼らを見捨てはしない。』

クリスチャンになったとしても、不安だとか、怖いなど思うことがあります。いやむしろ、神様は私達に「知らない道を歩ませ、知らない通り道を行かせる」お方なので、クリスチャンの人生は冒険の人生であり、だからこそ、ドキドキ、ワクワクすることがあります。そして、途中で大変だと思ふ時もあります。

でも、決して忘れないでいただきたいのは【主】は、決して私達をお見捨てにはならないということです。これは【主】に選ばれ、【主】に救われた者の特権です。

それはイスラエルを見ればよくわかります。イスラエルの人たちには怒られてしまうかもしれませんが、聖書にかかっているイスラエルの歴史は神様への反逆の歴史です。彼らほど、神様からの恵みを何度も何度も経験した民族は他にいないのに、彼らは何度も偶像礼拝をしたり、さらにはイエスキリストを拒絶したりしました。それでも、神様は彼らをお見捨てにならなから、聖書に書いてある通りに世界中から人を集め、今もなおイスラエルには人が集まっています。

あんなに争いや戦争があるにも関わらずです。それは【主】が彼らを見捨てておられない証拠です。

そして、この【主】の見捨てない愛は私達にも注がれています。救われた後、私達がどんなに困難を経験したとしても、【主】は勇士として立ち上がってくださり、敵を退け、私達に光と平安をくださるお方なのです。

3) 偶像に仕える者は恥を見る

だからこそ、【主】はこのような神様の救いと恵みがあるにも関わらず、それでもなお偶像に仕える者は恥を見ると言われています。17節を読みましょう。

42:17 彫像に抛り頼み、鑄像に向かって『あなたがたこそ私たちの神々』と言う者は、退けられて恥を見る。

偶像は、いわゆる偶像、仏像とかそういったものだけに限りません。私達を救い出し、私達のために戦い、私達に光を与えてくださる【主】がいるにもかかわらず、その【主】以外のものにより頼ませようとするものはすべて偶像です。

だから【主】は、私達が【主】以外のものにより頼むようになったとき、その人は恥を見るよ。といわれます。

当然ですよ。神様は預言の通りに救い主【主】イエスキリストをこの世に送ってくださり、預言の通りに私達を救ってくださり、預言の通りに、私達に光を与え、神様の事がわからない者を神様がわかるようにしてくださり、新しい道を歩ませてくださっています。

それにかかわらず、その【主】により頼むのではなくこの世のものにより頼むのならば、それは意味がないことであり、恥ずべきことなのです。

だからこそ、【主】に救われた者は【主】のみにより頼む決心を持つ必要があると思います。

まとめ)

【主】は救いを経験したものに「新しい歌を【主】に歌え」と命じられています。橋本さんに限らず、【主】の救いに与った私達は、心から【主】の救いの歌を賛美し、【主】に栄光を帰していきましょう。

時に、【主】が動いておられるように思えず。【主】が黙って私達を放置しておられるように思える時があるかもしれません。でも、【主】は産みの苦しみの時の女の人のようにうめきの声を上げながら、私達を助ける時を、敵を徹底的に倒す時を待っておられます。

【主】は決して私達を見捨てません。そのことを信じて、【主】のみにより頼んでいきましょう。

【主】は新しくされた私達に新しい歌を歌わせて、新しい人生を歩ませます。

いままでとは違う。【主】に導かれる人生です。時に不安やおそれを感じるかも知れませんが、【主】の導きを信じ、【主】に光と平安が与えられることを信じて、【主】に従い続けていきましょう。それこそが、救われた私達の生き方です。